



新雑誌

Climatic Change

の刊行

さきに予告のあった新雑誌 *Climatic Change* の第1巻第1号が最近到着した。気候変化の描写, 原因, 意味を探るための, 学際的国際雑誌を標榜して刊行された本誌の内容を簡単に紹介してみよう。

まず, 発刊の辞であるが, 気候変化の問題をめぐって, 気象学, 海洋学, 人類学, 医学, 農学, 経済学, 生態学等々のさまざまな専門領域の研究者が意見を交換する場を提供するのが第1の目標となっている。そして, 学問的水準をしっかりと維持しながらも, 2つ以上の分野の研究者が関心を持ち, 共通して理解できるように書くことが義務づけられている。内容は気候変化に関して, A. 専門的研究の現状の紹介, B. 他の専門分野の研究者にわかるように自分のアイデアを伝えること, C. ある問題解決のための新しい洞察を生み, あるいは, さらに研究を進展させる可能性をもたらすような創見を出すこと, を基本としている。したがって, 気候変化という一つの大きいテーマに対する, 本格的学際研究をめざしていると言えよう。

第1号には, つぎの7篇の論文が掲載されている。

H. Flohn/**Climate and Energy: A Scenario to a 21st Century Problem.**

S.H. Schneider/**Climate Change and the World Predicament: A Case Study for Interdisciplinary Research.**

R.M. Rotty and A.M. Weinberg/**How Long Is Coal's Future ?**

C. Marchetti/**On Geoengineering and the CO₂ Problem**

M.H. Glantz/**Nine Fallacies of Natural Disaster: The Case of the Sahel.**

R.W. Katz/**Assessing the Impact of Climatic Change on Food Production.**

G.G. Vickers and R.E. Munn/**A Canadian Haze Climatology**

Flohn の論文は, 人工起源の CO₂ の増加に伴う気候変化を論じ, 極の海氷の消滅と気候帯の北へのシフトを予言している。本誌の編集者の Schneider は, アメリカの NCAR に籍をおく新進気鋭の気候学者だが, 彼はこの論文で気候変化と世界がかかえている問題について非常に広い立場から問題点をとらえ, 学際的な研究の可能性を論じている。Rotty・Weinberg は今後の有力なエネルギー資源として石炭に注目し, CO₂ の増加に伴うエネルギー需給の変化, さらに, 石炭消費が加速する CO₂ 増加といったフィード・バックの関係を議論している。元来はアメリカ国内のエネルギー問題を論じたものだが, 普遍性が高いので収録されたようである。

Marchetti もまた CO₂ の問題を取り上げ, そのコントロールの一環として化石燃料の“燃料サイクル”の考えを提案している。このサイクルでは, 化石燃料の消費に伴って発生する CO₂ の収集, 液化, 運搬そして最終的には海洋深海中での投棄を考えている。Glantz は, 自然災害に関して通常言われていることの根拠のない点につき, 9つの誤信だと言っている。たとえば, 西アフリカ・サヘル地域における干ばつについての, “人間が間違いを犯したのだ” “雨が降りさえすれば何もかも正常に戻る”, “近代技術が解決する” といった一般化はすべて誤った考えによるとしてその根拠を示し, こうした誤信の除去も環境問題一般, とくに災害問題を扱う上での障害を減らすとしている。Katz は, 気候変化が食糧生産に及ぼすインパクトを, 統計モデルを用いて評価している。そして, 統計モデルの係数は普遍的なものではなく, 常に適当に調整する必要を強調している。Vickers・Munn はカナダにおける煙霧頻度の年平均図をつくり, 頻度の極大・極小域の成因と人工起源の汚染源の関係を論じている。

この雑誌刊行の趣旨が, 成功するかどうかは今後の結果を見なければならぬ。しかし, *Climatic Change* という人類の問題をオープンな場に引き出し, 高度の学問的レベルを維持しながら, 広汎な専門領域をカバーしようという意図は注目し値すると思う。もし, その成果が有意義なものとなるならば, 社会に役立つ面も期待される。これは, 単なる応用とか学際協力といったものでなく, 気候変化・気候変動という本質的に学際的なテーマに対する新しい方法論の提案とも考えられる。

本誌は年4回発行で, 個人購読 US \$ 20.00, 団体購読 (図書館レート) US \$ 40.00 である。発行所はオランダの D. Reidel Pub. Co. (新田 尚・投稿)

「天気」24. 10.